

20の講義内容

文法は、グラグラだ！どうすりやいいの？

指定の助動詞「だ」

「接続」体言及び体言相当のもの（形容詞・形容動詞の語幹、副詞、代名詞、数詞）、体言化したものに接続する。「だ」型の語

だ、ものだ、もんだ、なのだ、なんだ、のだ、んだ、からだ、ことだ、ただだ、ためだ、はずだ、ばかりだ

「活用」

	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
		だっ	だ	(だ)		
で						

「意味」

自分のことについて強く断定する場合
独り合点したりする場合

女性はぶつきらぼうに聞こえるためか使
用を避けることが多い。

戯曲の会話（怒り、軽蔑、強い主張）

「だ」

親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりして居る。

分らんでも困らない。

廿五萬石の城下だつて高の知れたものだ。

甥こそいい面の皮だ。

妙な病気があった者だ。

主任の癖に向こうから来て相談するなんて不見識な男だ。

個人でも、とどの詰りは腕力だ。

ことに語学とか文学とか云うものは真平御免だ。

今考えると是も親譲りの無鉄砲から起った失策だ。

相変らず空の底が突き抜けた様な天気だ。

失敬な奴だ。

是でも此下女の面より余つ程上等だ。

余計な手数だ。

入らざる心配だ。

畫学の教師は全く藝人風だ。

然し呼び付けるよりは感心だ。

町はずれの岡の中腹にある家で至極閑静だ。

今迄物理学校で毎日先生先生と呼びつけて居たが、先生と呼ぶのと、呼

ばれるのは雲泥の差だ。

何がアハハだ。

成程狸が狸なら、赤シヤツも赤シヤツだ。〔直筆69右⑤・筑摩文庫〔5〕〕

つまらん所だ。〔筑摩文庫〕

校長つてものが、これならば、何の事はない、煮え切らない、愚圖の異名だ。〔直筆65右④〕
もし山嵐が煽動したとすれば、生徒と山嵐を退治れば夫で沢山だ。〔直筆68右①〕

人の尻を自分で脊負い込んで、おれの尻だ、おれの尻だと吹き散らかす奴が、どこの國にあるもんか、狸でなくちや出来る藝當ぢやない。〔直筆68右②②〕

〔夏目漱石『坊つちやん』一五五頁〕

〔夏目漱石『坊つちやん』五三頁〕

〔夏目漱石『坊つちやん』五三頁〕

〔夏目漱石『坊つちやん』五七頁〕

〔夏目漱石『坊つちやん』五八頁〕

〔夏目漱石『坊つちやん』五八頁〕

〔夏目漱石『坊つちやん』五八頁〕

〔夏目漱石『坊つちやん』六〇頁〕

〔夏目漱石『坊つちやん』六一頁〕

〔夏目漱石『坊つちやん』六一頁〕

〔夏目漱石『坊つちやん』六三頁〕

〔夏目漱石『坊つちやん』六三頁〕

〔夏目漱石『坊つちやん』六一頁〕

〔夏目漱石『坊つちやん』六一頁〕

難有い仕合わせだ。〔直筆69⑨〕

野だの癖に意見を述べるなんて生意氣だ。〔直筆69左⑨〕

……何だ失敬な、新しく来た教師だと思つて……」と云つて着席した。〔直筆70②③〕

「史も教頭と同説だ」と云つた。〔直筆70左⑧〕

忌々しい、大抵のものは赤シヤツ黨だ。〔直筆70左⑨〕

どうせ、こんな手合を辨口で屈伏させる手際はなし、させた所で、いつ迄御交際を願ふのは、此方で御免だ。

〔直筆71右②〕

つまらん奴等だ。〔直筆73右⑤〕

尤も送別会杯の節は特別であるが、単独にあまり上等でない場所へ行くのはよしたい―たとへば蕎麦屋だの、團子屋だの―と云ひかけたら又一同が笑つた。〔直筆73右⑥⑥〕

いゝ氣味だ。〔直筆73左⑧〕

だんまりで辞令を下げ置いて、蕎麦を食ふな、團子を食ふなと罪な御布令を出すのは、おれの様な外に道楽のないものに取つては大変な打撃だ。〔直筆74右④〕

だまつて聞いていると勝手な熱を吹く。沖へ行つて肥料を釣つたり、ゴルギが露西亞の文学者たつたり、馴染

みの藝者が松の木の下に立つたり、古池へ蛙が飛び込んだりするのが精神的誤楽なら、天麩羅を食つて團子を呑み込むのも精神的誤楽だ。〔直筆74左④〕

一所に居るうちは、さうでもなかつたが、かうして田舎へ来て見ると清は矢つ張り善人だ。〔直筆77右⑦〕

こゝの夫婦はいか銀とは違つて、もとが士族だけに双方共に上品だ。〔直筆77左④〕

爺さんが夜になると、変な聲を出して謡をうたふには閉口するが、いか銀の様には茶を入れませうと無暗に出て来ないから大きに楽だ。〔直筆77左⑦〕

「こいつあ驚いた。大変な活眼だ」〔直筆78左②〕

「あの赤シヤツがですか。ひどい奴だ。どうもあのシヤツは只のシヤツぢやないと思つた。それから？」〔直筆80右⑨〕

厄介な所だ。〔直筆81右⑩〕

取り上げて見ると清からの便りだ。〔直筆82右⑥〕

清書するには二日で済んだが、下た書きをするには四日かゝつた。〔直筆82左⑥〕

「くゝいだ」

天 井はランプの油烟で燻ぼつてるのみか、低くつて、思わず首を縮めるくらいだ。〔筑摩文庫66〕

小供の時から、友達のうちへ泊つた事はほとんどないくらいだ。〔筑摩文庫 p126〕

十六七の時ダイヤモンドを拾つた夢を見た晩などは、むくりと立ち上がつて、そばに居た兄に、今のダイヤモンドはどうしたと、非常な勢で尋ねたくらいだ。〔筑摩文庫43〕

幾 尋あるかねと赤シヤツが聞くと、六尋ぐらいだと云う。〔筑摩文庫49〕

あなたは眼が大きいから役者になるときつと似合いますと清がよく云つたくらいだ。〔筑摩文庫89〕

あなたは眼が大きいから役者になると屹度似合ひますと清がよく云つた位だ。〔直筆65左⑩〕

おれは君子という言葉を書物の上で知つてるが、これは字引にあるばかりで、生きてるものではないと思つてたが、うらなり君に逢つてから始めて、やっぱり正体のある文字だと感心したくらいだ。〔筑摩文庫98〕

おれは君子と云ふ言葉を書物の上で知つてるが、是は字引にある許りで、生きてるものではないと思つてたが、うらなり君に逢つてから始めて、矢つ張り正体のある文字だと感心した位だ。〔直筆66左①〕

実を云うと、この男の次へでも坐わろうかと、ひそかに目標にして来たくらいだ。〔筑摩文庫101〕

分り過ぎて困る位だ。〔直筆81右⑩・筑摩文庫 p227〕

「おれは無論行くんだ。古賀さんが立つ時は、浜まで見送りに行こうと思ってるくらいだ」〔筑摩文庫41〕

「ことだ」
刺身も並んでるが、厚くつて鮪の切り身を生で食ふと同じ事だ。

〔夏目漱石『坊っちゃん』一三六頁〕

随分決断のない事だ。

〔直筆65右③〕

驚いたのは、おれがいか銀の座敷を引き拂ふと、翌日から入れ違に野だが平氣な顔をして、おれの居た部屋を占領した事だ。〔直筆76左⑥〕

「さうだ」

すると初秋の風が芭蕉の葉を動かして、素肌に吹きつけた帰りに、讀みかけた手紙を庭の方へなびかしたから、仕舞ぎには四尺あまりの半切れがさり／＼と鳴つて、手を放すと、向ふの生垣迄飛んで行さうだ。〔直筆

83右⑩〕

「のだ」

つい奉公迄する様になつたのだと聞いて居る

〔夏目漱石『坊っちゃん』四九頁〕

おれは是でも学資の余りを三十圓程懐に入れて東京を出て来たのだ。

〔夏目漱石『坊っちゃん』五八頁〕

「ものだ」

此下女はもと由緒のあるものだつたそうだが、瓦解のときに零落して、
鬚眉目（ひいきめ）は恐ろしいものだ。

〔夏目漱石『坊っちゃん』五〇頁〕

漢学の先生は流石（さすが）に堅いものだ。

〔夏目漱石『坊っちゃん』六一頁〕

廿五萬石の城下だつて高の知れたものだ。

〔夏目漱石『坊っちゃん』六一頁〕

広い様でも狭いものだ。

〔夏目漱石『坊っちゃん』六二頁〕

道中をしたら茶代をやるものだと聞いて居た。

〔夏目漱石『坊っちゃん』五七頁〕

此下女はもと由緒のあるものだつたそうだが、瓦解のときに零落して、
文学士なんて、みんなあんな連中ならつまらんものだ。〔筑摩文庫〕

おれの云はうと思ふ所をおれの代りに山嵐がすつかり言つてくれた様なものだ。〔直筆72右⑨〕

巾着切りの上前をはねなければ三度の御膳が戴けないと、事が極まればかうして、生きているのも考へ物だ。

〔直筆76左⑫〕

それにしても、もう返事がきさうなものだが―おれはこんな事に許り考へて二三日暮して居た。〔直筆77右⑫〕

「へえ、不思議なもんですね。あのうらなり君が、そんな艶福のある男とは思はなかつた。人は見かけによらない者だな。ちつと氣を付けやう」〔直筆80右①〕

「もんだ」

人間は大概似たもんだ。

〔夏目漱石『坊っちゃん』五九頁〕

文学士丈に御苦労千萬な服装（なり）をしたもんだ。

〔夏目漱石『坊っちゃん』六〇頁〕

大概顔の蒼い人は痩せてるもんだが此男は蒼くふくれて居る。

〔夏目漱石『坊っちゃん』六〇頁〕

かう校長が何もかも責任を受けて、自分の咎だとか、不徳だとか云ふ位なら、生徒を處分するのは、やめに
して、自分から先へ免職にあつたら、よさうなもんだ。〔直筆67左⑧〕

男は白い麻を使ふもんだ。〔直筆68左④〕

開いて見ると、非常に長いもんだ。〔直筆82右⑩〕

「んだ」

向うで部屋へ持つて来て御小遣いがなくて御困りでしょう、御使いなさ

いと云つて呉れたんだ。

〔夏目漱石『坊っちゃん』四九頁〕

みんなやっちゃつて是からは月給を貰うんだから構わない。

〔夏目漱石『坊っちゃん』五八頁〕

おれも職員しやくわんのいちにんの一人として一所いっしょにくつついて行くんだ。

〔夏目漱石『坊つちやん』一四〇頁〕

「本當ほんとうの本當ほんまのつて僕あ嫁が貰もらひ度どつて仕方しかたがないんだ」〔直筆78右⑥〕

「だけだ」

免職めんしやくされる前まへに辞表しじひょうを出だして仕舞しなふ丈だけだ。

〔夏目漱石『坊つちやん』一五四頁〕

「ださうだ」

家賃かぜんは九円五〇錢せんださうだ。

氣狂ききやうが人の頭あたまを撲ぶり付けつけるのは、なぐられた人がわるいから、氣狂ききやうがなぐるんださうだ。〔直筆69右⑧〕

「ためだ」

自分じぶん独ひとりりが手持て無な沙汰さたで苦くしむ爲ためだ。

〔夏目漱石『坊つちやん』一三八頁〕

「つもりだ」

今日は大おほいに飲のむ積つだ。

〔夏目漱石『坊つちやん』一三〇頁〕

「はずだ」

一人不足ひとりふそくですがと考かんがへてゐたが、是こゝは足たりりない筈はずだ。

〔直筆66右①〕

もう少し年としを取とつて相續さぞくが出来るものなら、今いまでも相續さぞくが出来る筈はずだ。

〔夏目漱石『坊つちやん』五二頁〕

「ばかりだ」

熱あつい許ゆるりではない。

〔夏目漱石『坊つちやん』五七頁〕

よしやれるとしても、今の様ようじゃ人の前まへへ出でて教育きやういくを受けたと威張おごれな

いから詰つり損こになる許ゆるりだ。

〔夏目漱石『坊つちやん』五三頁〕

君きみが談判だんぱんすれば又また悪口あくぐちを書かかれる許ゆるりだ。

〔夏目漱石『坊つちやん』一五六頁〕

たつた一人列ひとりりよくを離はなれて舞台まいたいの端はたに立たつてるのがある許ゆるりだ。

〔夏目漱石『坊つちやん』一四八頁〕

「ました」

それも赤あかシャツのねち／＼した猫撫ねこな声こゑよりはました。

〔夏目漱石『坊つちやん』一一九頁〕

こんな送別そうべつ会かいなら、開ひらいてもらはない方が余あまつ程ほどました。

〔夏目漱石『坊つちやん』一三八頁〕

會議かいぎと云いふものが、こんな馬鹿ばか氣きたものなら、欠席けつせきして晝寐しゆまいでもして居ゐる方がました。〔直筆68右⑩〕

「わけだ」

成程なりほど世界せかいに戰爭せんそうは絶たえない譯わけだ。

〔夏目漱石『坊つちやん』一五五頁〕

団子だんごは愚おろか、三日位さんじつばい断食だんじきしても不平ふへいはこぼせない譯わけだ。

〔夏目漱石『坊つちやん』一一七頁〕

さうすればこんな面倒めんどうな會議かいぎなんぞを開ひらく必要ひつやうもなくなる訳わけだ。

〔直筆67左⑨〕

「んだ」

貴様あなたの様な奸物あやうしなはなぐらなくつちや、答こたへないんだ。

〔夏目漱石『坊つちやん』一六四頁〕

「だか」

只困ただるのはどつちが悪わる者ものだか判然はんぜんしない。〔直筆81左②〕

字あじがまづい許ゆるではない、大抵たいてい平假名ひらがなだから、どこで切きれて、どこで始はまるのだから句讀くわんをつけるのに余あまつ程ほど骨ほねが

折よれる。〔直筆82左⑩〕

「だつ」

只氣ただの毒どくだつたのはうらなり君きみで、おれが、かう云いつたら蒼あはい顔かほを益えき蒼さうくした。〔直筆74左⑨〕

「だね」

「へえ、活眼かつがんだね。どうして、睨にらんどるですか」〔直筆78右⑩〕

「厄介やくがいだね。渾名あだなの付ついくる女おんなにや昔むかしから碌ろくなもの居ゐませんからね。さうかも知しれませんよ」〔直筆79左

③〕

先達ての手紙を見たら嘸喜んだらう。「直筆77右⑩」

宿屋丈に手紙迄泊る積なんだらう。「直筆82右⑨」

※このページ数は、新潮文庫『坊っちゃん』に拠って示した。

漱石の『坊っちゃん』が、明治三十九年（一九〇六）四月一日に雑誌「ホトトギス」（直筆原稿に墨筆で「附録、別丁ニクム」とある）に発表されて以来、この一〇〇年の間、どのくらいの日本人がこの作品を読んできたであろう。読み手は、現行出版刊行されている各種文庫本で読む。さらには、漱石全集で、当代の読者であれば、雑誌「ホトトギス」か、もしくは単行本『鶉籠』〔春陽堂刊〕等でお読み成ってきたのではなからうかと推測めいたことも考えてみると面白からう。

この小説『坊っちゃん』が活字刊行されているが、この直筆原稿が存在することは、その研究者間ではよく知られており、昭和四十五年四月に、柳沢真次郎を版權所有者として、番町書房から限定二千部、定価三万円で複製本が世に出たのである。このためか、直筆原稿をもとに研究した論文類も他の漱石作品と比較してみても多く産出してきたのである。先頃は漱石直筆原稿は、値段は高価だが他にも『こゝろ』『道草』『それから』などが出版されてきている。こうしたなかにあつて、今年秋、集英社新書から『直筆で読む「坊っちゃん」夏目漱石』が僅か千二百円で世に流布した。このことで、活字でしか見たことのない『坊っ

ちゃん』が身近に持参して気軽に読むことができるようになったのである。活字本の多くはこれまで、活字化された雑誌「ホトトギス」に依拠するのだが、直筆原稿と既に異なりが多く発生してきているのである。こうした気づきは「右左」と「左右」、「小供」と「子供」、「顔」と「面」などなど、文字表記では、その多くが「赤シヤツ」と表現しているなかにあつて、たった一例であるが、清に宛てた手紙文のなかで、平仮名でしか読めない清のために坊っちゃんが平仮名表記した部分が一箇所（因みに、鷗外が「箇」字を用いるのに対し、漱石は省画体「ヶ」で表記する。この省画体は「个」と表記した例が古いのだが、本邦の『日本書紀』や『続日本書紀』には見えない表記である。凡て「箇」字の表記であり、これが平安後期になると「ヶ」表記となつて表出する）だけある。試しにお探しあれ。ここからが文法である。直筆原稿7左⑥に「そんなものは欲しくない」とあるところを、「ホトトギス」は、「そんなものも欲しくない」と読み違えて記載する。この漱石の「む」は「む」のような字表記であつて、字形相似の見誤りとなる字である。『鶉籠』は、語調を読み取り「は」と表記する。また、直筆原稿11右①②「何の用だらう」は、「ホトトギス」では「何か用だらう」と記載表記する。ここは文脈語調がそのまま読めるところであるため、『鶉籠』は踏襲してしまふ羽目となっている。

では、ここで文法なるものを真剣に一つ一つ、ご自分で考えてみようではないか。

《課題1》「秋も深まる」は、どうしても「も」？ということをごここで考察してみましよう。

「秋も深まってきました」

の係助詞「も」を用いた表現が、次の

「秋が深まってきました」

「秋は深まってきました」

と相違するのは、どういうところに起因しているのでしょうか？

《課題2》接続助詞「ので」と「から」は、どのように使い分けてきたのでしょうか？次の例文を参考に考えて見ましよう。

接続助詞「ので」

○幸ナイフが小さいのと、親指の骨が堅かったので、今だに親指は手に付いて居る。「直筆『坊っちゃん』1左⑤」

○是も親譲りの無鉄砲が崇つたのである。「直筆『坊っちゃん』11右⑧」

接続助詞「から」

○しばらくすると井戸端でざあ／＼音がするから、出て見たら竹の先へ蝦蟇口の紐を引き懸けたのを水で洗って居た。「直筆『坊っちゃん』5左⑫」

○すると清は澄ましたもので御兄様は御父様が買つて御上げなさるから構ひませんと云ふ。「直筆『坊っちゃん』6左④」

○母が死んでから五六年の間は此状態で暮して居た。「直筆『坊っちゃん』7左⑨」

○母が死んでから六年目の正月におやちも卒中で亡くなつた。「直筆『坊っちゃん』8右⑤」

○世話をしてくれるにした所で、喧嘩をするから向でも何とか云ひ出すに極つて居る。「直筆『坊っちゃん』8右⑫」

○どこかへ奉公でもする氣かねと云つたらあなたが御うちを持つて、奥さまを御貰ひになる迄は、仕方がないから甥の厄介になりませうと漸く決心した返事をした。「直筆『坊っちゃん』9右⑩」

○家を畳んでからも清の所へは折々行つた。「直筆『坊っちゃん』11左⑧」

○おれは野だの云ふ意味は分らないけれども、何だか非常に腹が立つたから、腹案も出ないうちに起ち上がつて仕舞つた。「直筆『坊っちゃん』70右⑨」